親馬鹿の旅

大町桂月

青空文庫

金さへ返せば、鬼も佛。重荷の一部がおりたかと思へば、我心も輕くなり、金なほ餘れるに、家に歸るより早く、さあ來い、何處へでも、伴れて行つてやらうと、次男と三男とをつれて、立ち出でたり。長男は、近く箱根へつれて行きしことあり、學校の都合もあり、殊に、この日、家にあらざりければ、つれざる也。

さて、都を離れて、何處へゆけば子供は面白がるかと、いろ〳〵考へしが、江の島は、山もあり、海もあり、貝細工あり、鮑取りもあれば、子供をつれての旅は、これに越したる處はあらざるべしとて、江の島へと思ひ定めて、新橋より汽車に乘る。

まだ次男が八歳、三男が六歳の時の頃也。風寒ければ、汽車の窓は開かず。玻璃越しに、山を眺め、海を眺め、田を眺め、茅屋を眺め、煙突を眺め、荷車を眺め、行人を眺めて、喜びあひしが、冬の日脚低く、夜に入りて、江の島に到りて宿る。晩食の膳に大いなる鰕上りけるに、兒等いたく喜べり。

あくる日、起き出づれば、太陽將に海洋の彼方に上らむとす。日の出を見よと、二兒を呼び起す。二兒、眼をこすり〳〵日の出を眺めけるが、さまで喜べる樣も無し。二兒をつれて、濱邊を散歩しけるに、一艘の漁舟、沖より歸りしばかりにて、漁せし鰕、少しばかり舟に有り。それを買ふ。これで少しは喜べるさま也。

朝食を終へて稚兒ヶ淵にいたる。この日の遊客にて、こゝに來れるは、我等が『い』の一番也。鮑取の男、路に要す。一人許せば、又一人來る。それに許せば、又一人來る。うるさくて、拂ひ切れず。終に一同にとらすことにす。一同齊しく海に入る。巉巖怒濤の間に泳ぐを見るが面白かるべしとは、子供の心を知らぬ親馬鹿の料簡、まだ水泳を知らぬ二兒は、さばかり面白がりもせず。やがて、數個の鮑を採りて來りたれど、さきに鰕を買ひし如くには、喜びもせず。洞窟に入りても、喜びはせざるべしとて引きかへせば、一人の男、鰕を取つて來るから、錢をくれよといふ。錢をやりて久しく待ちしに、上り來りて曰く、今日は、鰕居らず、これにて許されよとて、海草を出す。子供は益　よろこばず。あざむかれて、腹立だしくもあれど、取つて來ぬ前に錢をやりしが、こちらの失策とあきらめ、貝細工を擇ばせて買ひてやりしに、さまで喜べるさまも無し。

鎌倉に行かば、喜ぶこともやとて、長谷の大觀音と大佛とを見せけるに、これでも喜べる樣はなし。この模樣ならば、八幡宮、鎌倉宮へ行きたりとて喜びはせざるべし。箱根へでもつれて行かば、或ひは喜ぶこともやとて、箱根にいたり、塔ノ澤の温泉宿に投ず。一度つれて浴湯にゆきしに勝手を覺えて、二兒自から相伴うてゆく。翌朝も、また食前に、我を待たずして行き、食後もまた行く。往いてのぞけば、二人にて、ちやぶ〳〵湯をかきまぜて、それで非常に喜べるさまなるに、われも始めて滿足す。何が一番面白かりしぞと問へば、湯をかきまぜるが、一番面白しといふ。そこには、夢想も及ばざりき。貝細工、鮑取り、大佛など、いろ〳〵考へしも、すべてみな子供の心を知らぬ失策なりし也。

（明治四十年）

青空文庫情報

底本：「桂月全集　第二巻　紀行一」興文社内桂月全集刊行會
　　1922（大正11）年7月9日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：H.YAM
校正：門田裕志、小林繁雄
2008年8月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

親馬鹿の旅

大町桂月

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/